

eポートフォリオを利用した大学講義理解の試み —専門科目の講義をもとに—

三宅 若菜・福島 智子

要 旨

学習・評価理論のパラダイム変換の中で、継続的に学習成果物や学習履歴などが評価できるeポートフォリオが注目されている。本実践では、留学生が大学の講義に参加できるようになることを目標とした日本語授業において、eポートフォリオを利用した。その結果、学習者は、自身の学習に対してモニターを行っている様子や、自分の変化を実感している様子が窺われた。また、クラスメートと学習記録を共有することで、eポートフォリオ導入前と比べ深く省察された記述をするようになったことがわかった。一方で、教員に向けたメッセージ性が薄れることで個別ニーズへの対応を逃すおそれや、記録方法に工夫が必要であることもわかった。今後、eポートフォリオを広い範囲で活用するにあたって、考慮が必要である。

【キーワード】 講義理解、eポートフォリオ、専門科目、形態素解析、自律的な学習

1. はじめに

筆者らは、学群1年生の留学生対象の日本語授業や交換留学生対象の日本語授業において、大学の講義に参加できるようになることを目標とし、学群生1年生が必修とする教養科目や専門科目担当の教員と連携し、様々な教材を開発してきた（福島ら2009、福島・三宅2011、三宅・福島2012、三宅・福島2013）。

この授業では、大学での講義を聞く上で求められるスキルを身につけ、自律的に運用できるようにすることを目標とした。そして、授業で学んだスキルは、授業後、専門科目の講義で実践し、それを次の授業で確認するという方法で授業を行ってきた。毎回授業終了時には、授業で扱ったタスクシートや課題を見ながら、授業内容を振り返り自己評価を行う「学習記録」に記入することで振り返りを促してきた（授業実践の詳細については、三宅・福島（2012）を参照されたい）。

「学習記録」を書くことで学習の振り返りが促されている学習者もいた一方で、「今日は専門用語について勉強した」、「ノートの取り方をみんなで話し合った」といった授業内容の単純な報告も見られたり、「先生が言うから書いたほうがいいと思って書いた」、「先生が知りたいと思って書いた」など教員のために書いたという声もあったりした。

このように学習者が自ら学習について振り返る意義を見出していないのは、日本語で記述する時間が授業終了時の5分しかなく、学習について振り返り外国語で記述するには、時間が不足していることもあると考えた。そこで、時間的な制約がなく記入することが可

能で学習の履歴や成果物を継続的に評価できるeポートフォリオを活用することを試みた。

2. eポートフォリオの活用

近年、eポートフォリオが注目を集めている背景には、学習・評価理論のパラダイム変換が大きく関係しているといわれる。行動主義の時代においては、教師が学習者に対して知識を伝達するための指導が求められた。評価は客観的能力測定法であるテストが用いられ、その結果のみが重視されていた。しかし、構成主義の台頭とともに学習活動や課題等において、必要な知識を収集・統合し適切な判断を下しながら課題解決を図る力が必要とされ、学習者が自律的に学習を行うことが求められるようになった。また、評価も、学習と一体化し切り離すことはできないものとされ、学習活動のプロセスを通じた継続的な学習成果物や学習履歴などを重視するようになったとされる(森本2012)。

本実践でも、大学の講義が聞けるようになることを目標とした日本語授業において、時間的な制約に囚われることなく、学習について自らが振り返る意義をより高めるために、学習記録の記述を「Googleドライブ」で行った。「Googleドライブ」はインターネット上にファイルを保存できるオンラインストレージで、Gmailのアカウントを持っていれば、ファイルの共有ができ、ファイルの閲覧、編集を行うことができる。本学ではGoogle社の提供する「Google Apps Education Edition」というシステムを利用しているため、学習者全員がGmailのアカウントを持っており、「Googleドライブ」を利用した学習記録活動を容易に行うことができた。「Googleドライブ」では、以下のことを行うことにした。

- ①毎回の授業目標の設定と修正
- ②授業活動に対する自己評価、感想及びそれに対する相互評価、教師評価
- ③専門科目の講義における課題
- ④ルーブリック(評価基準)による目標、現状分析

図1 eポートフォリオ



図1は、本実践におけるeポートフォリオである。本稿では、紙面の都合上、①～③について行った「学習記録・課題」(以下、学習記録)について主に論じる。

3. 実践概要

実践は、桜美林大学2013-4年度日本語プログラムにおける日本語選択科目「日本語演習

(上級・聴解とノートの取り方)」(全15回、1回90分)において行った。学習者は、日本語上級レベルの短期留学生14名と学群留学生11名、計25名で、出身は中国21名、韓国3名、タイ1名であった。

授業スケジュール例は、表1の通りである。第10回目と第12回目には、実際に日本人学生とともに教師主導型による一斉授業タイプの講義を受けた。そして次の回には、それぞれの講義実践を振り返る活動がそれぞれあった。

表1 授業スケジュール例 (2013年9月～2014年1月)

回	主な内容
1	オリエンテーション、講義に必要なスキルを考える、ポートフォリオ作成
2	講義の構造、内容を理解する
3	接続詞を捉える
4	専門用語を理解する
5	復習
6	ノートテイキング
7	リアクションペーパーの練習①RP作成に必要な表現
8	リアクションペーパーの練習②RP作成のストラテジー
9	中間の振り返り、講義実践準備
10	講義実践①「政治学概論」
11	講義実践の振り返り
12	講義実践②「環境リスク論」
13	講義実践 振り返り
14	復習クイズ
15	振り返り

授業終了後は、その日の学習活動目標について振り返り、オンライン上の「学習記録」に記入した。

図2は、2014年第3回目のオンライン「学習記録」を記入した例の一部である。この回は、第3回「接続詞を捉える」がテーマであった。この日は、1～3を学習目標として授業を行った。

1. 講義を聞くときに、接続詞を意識している。
2. 重要な内容に入るときにどのような接続詞が出るか知っている。
3. 接続詞によって、次の話の内容が予測できる。

図2 第3回オンライン「学習記録」の一部

14s学習記録・課題(月・火曜日締切) ☆ ■				
ファイル 編集 表示 挿入 表示形式 データ ツール ヘルプ 変更内容をすべてドラ				
fx				
	A	B	C	D
1	学習記録			
2	■学んだことを整理し、自分の学習状況を書こう	学生1	学生2	学生3
3	I 今日の目標 1 講義を聞くときに、接続詞を意識している。 2 重要な内容に入るときにどんな接続詞が出るか知っている。 3 接続詞によって、次の話の内容が予測できると思う。	1. ○→○ 2. △→○ 3. △→○	1. ○→○ 2. △→○ 3. △→○	1. ×→○ 2. △→○ 3. ×→○
4	II 授業内容 講義の構造を理解し、接続表現を捉える	今日は接続詞について	今日は講義の重要な内容を	今日は、「環境経済学」という
5	III 感想	接続詞や指示詞を整え	接続詞の重要性が分かった。	「つまり」、「要するに」という接
6	IV 課題 あなたが履修している講義で、以下の部分を聞いて書きだしてください。 ・接続表現とその機能 ・Aの内容を予告する表現/まとめる表現 ・列挙の表現	「現代会計入門」では	「現代社会と教育A」という授業	「日中交流史」という授業では
7	V クラスメイトコメント(火曜日)	6:よくできましたね。では	9:接続、列挙とまとめるの表	10:よく頑張ったね！自分の
8	VI 教師コメント(水曜日)	「そうすれ」という言葉	クラスメイトのコメントにあるよ	よくまとめました。これからは

学習者は、授業終了後に、I.～VII.に関して記述した。

以下、第3回目のオンライン「学習記録」について詳しく説明する。なお、個人の特定につながるような箇所は [] とした。

I. 授業内容の理解度を○△×で自己評価する(授業開始時→終了後)

第3回「接続詞を捉える」に関する1.～3.の目標について、授業開始時の理解度→授業終了後の理解度をそれぞれ○、△、×で自己評価し、自らの理解を確認した。

II. 授業の内容についてまとめる

講義の構造を理解し、接続表現を捉えることを中心として、授業内容をまとめた。

図3 第3回オンライン「学習記録」
II. 授業内容の一部

今日は、「 [] 」という授業を通して、講義の接続表現について勉強した。Dの内容、つまり話の切れ目を指示する接続表現は、主に接続詞、指示詞、フィラーという3つの種類がある。例に挙げますと、「要するに」、「つまり」などの接続詞と「これ」、「これは」などの指示詞と「まあ」、「で」などのフィラーである。これらの接続表現は、講義の流れを指示しながら、次の内容へ展開するという役割がある。講義の内容を十分に分かるようになるため、接続表現を心がけなければなりません。

III. 授業の感想を書く

授業についての感想を自由に書いた。

図4 第3回オンライン「学習記録」
III. 感想の一部

「つまり」、「要するに」という接続表現は授業中耳によくするが、講義の中心的内容だけに集中していたので、あまり気づかなくていい。その結果、講義の粗筋だけわかったが、流れをはっきりと取れなかった。今日の授業を受けたあと、接続詞、フレーズ、メタ言語、指示詞で講義の内容が変わったことが分かった。それぞれを注意すれば講義の構造を見分けることはできると思う。今後は接続表現を心掛けながら講義の内容を十分に聞き取れるように頑張りたいと思う。

IV. 自らが参加している専門科目の講義において、授業で学習したことを実践し出された課題を行う

課題では、自分が履修している講義で、以下の部分を聞いて書き出してくることで、接続詞に意識を向けるようにした。

- ・ 接続表現とその機能
- ・ A (= 講義の中心的部分) の内容を予告する表現/まとめる表現
- ・ 列挙の表現

図5 第3回オンライン「学習記録」
IV. 課題の一部

「[]」という授業では、1)20世紀初頭の日本は中国の語新思潮・新学説の発祥地となりました。更に、清政府の日本留学奨励政策は、留日ブームの形成に重要な役割を果たしました。(順接)2)同時に、中国留学生のための学校も次々開設されました。例えば、1898年には、日華学堂、成城学校清国留学生部、... (例を挙げて次へ展開する)3)20世紀初頭に入り、科挙制度の廃止や日露戦争の日本の勝利によって、留学生の数は激増しました。しかし、1906年以後、留学生数は徐々に減少していく。(逆接)4)では、今日はここまでです。来週は日中文化交流についての映像を見ます。(まとめる部分と予告)

V. クラスメートがI.～IV.についてコメントする

クラスメートは、教師が指定したクラスメートに対して、コメントを記述した。コメントするクラスメートは9番の学生、10番の学生というように教師が指定し、コメントする相手は、毎回異なるようにした。

図6 第3回オンライン「学習記録」
V. クラスメートコメントの一部

9:順接、列挙とまとめるの表現はそれぞれ一文を例を挙げたが、もっと詳しく記入したほうが良いと思う。	10:よく頑張ったね！自分の短所も分かっていてその短所を補うため頑張っているみたい。
---	--

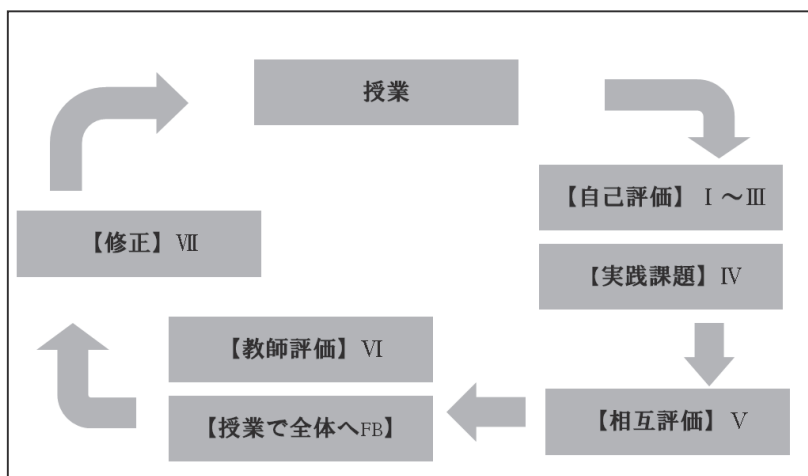
VI. 教師がI.～V.についてコメントする。

教師は、学習記録にコメントするだけでなく、次の授業において、オンライン上で記入されたI.～VI.についてプロジェクターで映し出し、の記録内容についてクラス全体で確認し、必要があれば補足を行った。また、専門科目の講義でどのように対応したのかを振り返った。

VII. 修正を行う

授業後、教師やクラスメートの指摘により修正を行った。指摘及び修正は、特にIV. 専門科目における課題が多かった。

図7 オンライン「学習記録」による学習サイクル



以上をまとめると、オンライン「学習記録」は、図7のような学習サイクルで行っていることになる。授業の後、【自己評価】 I.～III.と【実践課題】 IV.を行い、その後【相互評価】 V.と、【教師評価】 VI.を行い、次の授業で全体へのフィードバックを行った。そして、その次の授業までに【学習記録の修正】 VII.を行うというサイクルで学習を行っていった。

4. 調査方法

実践に関する調査は、eポートフォリオの「学習記録・課題」(オンライン学習記録)、およびインタビュー調査により分析を行った。

オンライン学習記録から学習者の態度や評価を調べるため、データを形態素解析し、頻出する語群傾向を抽出、分析を行った。藤井他(2005)では、社会福祉学・心理学・看護学において、行動、態度、心理、価値観を数量化し、計量的に分析できるとし、形態素解析ソフト「茶筌」を例に具体的な分析の手順や分析の応用例、論文事例などを挙げている。また、教育分野においても、学習内容についての振り返りを自由記述したデータを分析した調査例(例えば、奥野2007、荻宿ほか2012)が報告されている。本研究でも、これらの先行研究を参考として、オープンソースの形態素解析エンジン「Mecab」による形態素解析を行った。

また、インタビュー調査は、授業終了後、学習者に、本実践の評価及び改善を目的とし、実施した¹⁾。まず、対象となる学習者全員に20～30分程度の半構造化インタビューを行い、

¹⁾ 学習者に対するインタビューは、授業を履修した学生のうち、調査研究への協力に同意した学生に対して、行った。インタビュー項目①～⑥を話の内容に応じて行った。

インタビュー項目：

- ①授業を受けてみて、どうでしたか。
- ②授業を受けて、役に立った点はどのようなことですか。

トランスクリプションを全て発話どおりに作成し、インタビューデータとした。次に、実践のうち、eポートフォリオに関連するインタビュー箇所に着目し、内容を分類、それぞれに対する分析、考察を行った。

5. 調査結果

オンライン学習記録で振り返りに記録された文字数をeポートフォリオ導入前と比較したものが表2である。

表2 振り返りに記録された文字数の変化

	導入前	導入後
時期	2012年9月～2013年1月	2014年4月～7月
学生数	8	12
出身	中国6、韓国2	中国11、タイ1
内訳	短期留学生8	短期留学生10、学群留学生2
字数	97.1	220.9
		255.6

eポートフォリオ導入前は、2012年度同科目の「学習記録」で、授業の振り返りは「学んだこと」として記述したものの、導入後は2014年度同科目のオンライン「学習記録」で、「Ⅱ. 授業内容」、「Ⅲ. 感想」の項目で記述したものである。それぞれの項目の文字数をカウントし、学習者数で割った平均字数を、振り返りに記述された文字数とした。

eポートフォリオ導入前は、授業の振り返りは「学んだこと」という項目のみで、導入後は学習の振り返りをさらに促すために「Ⅱ. 授業内容」、「Ⅲ. 感想」の項目を分けたため、単純に比較はできないが、文字数がかなり増加していることがわかる。

さらに、振り返りの内容について調べるため、eポートフォリオ導入後の「Ⅲ. 感想」を形態素分析した結果が、以下の通りである。表3頻出動詞は、20回以上頻出した動詞である。表4頻出名詞は、20回以上頻出した名詞である。以下、頻出名詞、頻出動詞と頻出順位について例のように示す。例：(名・1) = (頻出名詞・1位)

またそれはどうしてだと思いますか。

③授業を受けても、あまりよくできるようにならなかったことはどのようなことですか。またそれはどうしてだと思いますか。

④この授業を受けて、自分が履修している専門科目の講義に参加するとき、変化があったと、自分で感じることはありましたか。それはどのような時ですか。

⑤10回目と12回目で実践講義を行いました。参加してみてどうでしたか。

⑥授業で扱ったこと以外で、講義に参加するとき、困っていることはありますか。

表3 頻出動詞

順位	動詞	出現頻度
1	する	388
2	思う	167
3	なる	116
4	分かる	106
5	聞く	89
6	できる	74
7	書く	61
8	ある	60
9	取る	60
10	考える	33
11	知る	32
12	使う	29
13	出る	27
14	まとめる	25
15	調べる	20
15	言う	20

表4 頻出名詞

順位	名詞	出現頻度
1	講義	182
2	授業	138
3	内容	103
4	専門用語	75
5	先生	69
6	勉強	67
7	注意	66
8	接続詞	59
9	リアクションペーパー	53
10	構造	50
10	ノート	50
12	前	47
12	自分	47
14	今日	46
15	理解	44
16	今	36
17	話	34
17	部分	34
19	二酸化炭素排出量	32
20	人	31
21	説明	29
21	重要	29
23	意味	27
23	意識	27
25	流れ	26
25	意見	26
27	地球温暖化	23
28	認識	21

この授業のテーマでもある「講義」(名・1)、「専門用語」(名・4)、「接続詞」(名・8)「リアクションペーパー」(名・9)、「構造」(名・10)や、「聞く」(動・5)、「ノート」(名・10)を「取る」(動・8)など、この授業での目標としていたことに関する用語すべてが意識されており、授業のねらい通りに学習が進んだことが窺えた。

また、授業では、講義の構造を理解したうえで、講義内容の「流れ」(名・25)を把握することを目指していたため、「流れ」という用語が抽出されたと考えられる。ちなみに、「二酸化炭素排出量」(名・19)、「地球温暖化」(名・27)が多く抽出されたのは、2013年度の講義実践におけるテーマが『地球温暖化』だったためだと考えられる。

さらに、「前」(名・12)「今」(名・16)「これから」「今後」など時間に関係する用語が入っている記録は全部で、127件あった。そのうち、「前」「今」など2つの時を同時に挙げて述

べているものは全部で43件、「前」「今」「今後」など3つの時を同時に挙げて述べているものは全部で18件あり、これまでの自分が理解していなかったことと新たに理解したことを比較しながら、学んでいる可能性が窺われた。

一方、「自分」(名・13)、「思う」(動・2)「考える」(動・10)という自己評価を記述する際に使われる可能性のある用語は合わせて、263件あった。そこで、時間に関する用語と、自己評価に関する用語について、基となる学習記録データをたどり、関連したインタビュー調査結果も照合させた。これについて、次項で論じたい。

6. 分析と考察

オンライン学習記録の形態素解析の結果から、基となる学習記録データをたどり、詳細に分析した結果は次の通りである。なお、オンライン学習記録の具体例はP-○とし、()は授業日、 は、抽出した用語とする。また、関連したインタビュー調査結果も合わせて論じる。インタビュー調査データの具体例は、I-○とし、()はインタビュー調査を行った年として記す。

6.1 学習に対するモニタリング

6.1.1 オンライン学習記録の分析

オンライン学習記録の形態素解析から、「前」「今」など時間の経過に関係する用語と、「自分」「思う」「考える」など自己評価に関係する用語を抽出、分析した結果、学習に対しモニターを行っていることが明らかになった。

●時間の経過に関係する用語

【自分の問題点に気づく】

「前」から「今」という流れで述べている学習記録は13件あり、これまでの状況を振り返って、今日の授業から気づいたことを述べていた。P-1は、これまではわからない専門用語があるとその意味を気にしすぎていたが、専門用語の意味を理解するには、その後の先生の説明をよく聞くことが重要だという気づきを記述したものである。

P-1 「以前は、分からない専門用語を聞くと、その単語の意味は一体何だろうと気にしすぎて、逆に先生の説明を聞き落すことになりました。今日の授業を通じて、専門用語を理解するために、先生の説明をよく聞くのも非常に重要だと気づきました。」(14.5.14)

また、「今日」などの用語を用い、その日の学習内容で気づいたことを述べるにあたって、これまでと比較して述べているものは、6件あった。

P-2 「今回授業の内容は本当に講義でよく出てくる言葉です。前は講義で気付かなかったです。これからの講義で役に立つと思います。」(13.5.8)

【今後の方針を立てる】

「今日」の学習内容から「今後」の抱負や目標を述べている記述は、24件あった。

P-3 「今日は自分の意見を書くストラテジーを復習することによって、それを深く理解するようになった。しかし、講義を聞きながら、それを活かしてリアクションペーパーを書くのはやはり難しいと思う。今後はどんどん練習して、役に立てるリアクションペーパーを書くように頑張りたいと思う。」(14.6.4)

また、今日の学習内容から「前」の状況、または「前」の状況から今日の学習内容を書き、最後に「今後」の目標という流れで、3つの時を挙げて書かれているものは、19件あった。

P-4 「今日の授業では講義の構造を示す接続表現について学びました。もう3年生になりましたけど、今までの講義で接続詞を注意しながら講義を受けたことがあまりなかったと思います。それで、授業終わったら頭に先生が言った冗談や余談しか残ってなかったかなと思いました。プリントに出ている接続詞を見ると良く分かりますけど、授業中にはあまり出てこない場合もありますので、ちゃんと授業の内容を取れなかったこともあります。むしろ、メタ言語表現のほうが多いと思うので、それを分析する力を高めようと思いました。」(13.5.8)

【日本語力を評価する】

「以前」と「今」を比較するなど、時間的な視点から自分の学習の理解度や態度を比較して述べている記録は、15件あった。例は、リアクションペーパーについて、前回書いたものと比較しながら、今回の内容について評価している記述である。

P-5 「今回の授業では実際に授業を聞いてそれについてリアクションペーパーを書きました。前回と同じく、まだ完璧なリアクションペーパーを書くことはできませんでしたが、ストラテジーや構造を考えながら書くことにより、以前よりスムーズに書けたと思いました。」(13.6.12)

●自己評価に関係する用語

【今後の方針を立てる】

「自分」、「思う」「考える」という用語とともに、「今後」の学習内容についての記述が、用いられる記述は56件見られた。そのうち20件は、例のように、授業で行った内容の理解を示したうえで、今後どうするかという内容を書いていた。

P-6 「とくに話題提示が重要だと思うので、これからしっかり聞き取れるように練習しようと思います。」(13.5.8)

【問題の原因を分析する】

また、自分の課題や理解度を評価し、振り返りを行っている記述が56件あった。P-7は、ノートを取れないことで、講義の流れが捉えられていないことに気づき、その原因は、これまで学習してきた講義の構造や講義の流れ、専門用語などが実は身に付いていなかったからだ、と自分のこれまでの理解を振り返っている記述である。

P-7 「講義の構造」、「講義の流れ」や「専門用語」それぞれ勉強している時、そんなに難しくないと感じますが、実際に全部、ノートを取る練習に入れたら、ちょっと混乱になってしまうと

気がします。自分はまだちゃんと講義の内容を、タイトルを付けるところまでまとめることができないと気付きました。先生の講義の流れがまだはっきり分からないということが原因の一つだと思えます。」(14.5.21)

以上、オンライン学習記録の分析から、学習者は、自分自身の問題点に気づく、今後の方針を立てる、日本語力を評価する、問題の原因を分析するなど、自身の学習に対してモニターを行っている様子が窺われた。自分の学習に対しモニターを行うことは、自律的な学習に不可欠な要素であるとされる (Schunk&Zimmerman2008=2009)。学習者が自律的に学ぶ機会をオンライン学習記録が提供しているともいえるだろう。

6.1.2 インタビュー調査の分析

実際に、インタビュー調査からも、オンライン学習記録に学習内容について記述することで、自分の変化を実感できるとのコメントがあった。

I-1 「自分がどんな変化があるかについて振り返ることができ、とてもいいと思います。」(2013)

I-2 「自分がどのように変化してきたかということで、やっぱり効果があると思う。」(2014)

また、自分のできることと、できないことが確認でき、それをさらに教師からアドバイスされるので、動機づけになったという声、今後の目標や計画が立てられたという声もあった。

I-3 「自分のその授業についての自分がどれくらいできるか、また自分の不足とか、知っているかどうか、そして先生が見て、アドバイスして、これから自分のその不足を直したいとがんばりたいという気持ちになる」(2014)

I-4 「自分の弱いところと長所がわかる。今は何ができないのか、できるのかということも。自分のこれからの勉強の計画を立てることができる。」(2013)

以上、インタビュー調査を分析した結果、学習者は、自分の変化への実感、学習状況の把握、今後の目標設定などを行っていることが確認できた。これらの行動は、自分の学習に対するモニタリングであるといえ、インタビュー調査の分析結果からも、オンライン学習記録の分析結果と、同様の結果が示されたといえるだろう。

6.2 クラスメートの存在

さらに、オンライン学習記録の分析では、クラスメートの存在に関する分析結果も出た。

オンライン学習記録では、V. クラスメートコメントが毎回記述され、学習者同士の活発なやりとりがあった。多くは、P-8のような励ましのコメントであった。

P-8 「文の終わりごとに自分の意見、ストラテジーを活用して表したのが読み手に対して分かりやすく素晴らしいと思う。うまくできたね。」(14.6.11)

中には、P-9のような具体的にアドバイスするコメントも見られた。

P-9 「リアクションペーパーの書き方はもう身につけたそうですね。履修している授業でも活

用して、よかったと思います。しかし、もっと接続詞を入れたり、列挙などの表現を用いたりしたら、もっと完璧なりアクションペーパーを書けるようになるのではないのでしょうか。」(14.5.28)

一方で、オンライン学習記録のⅡ. 授業内容やⅢ. 感想の記述に、重複がいくつか発見された。これは、クラスメートの記述を一部引用したまま自分の意見、感想としているためだと考えられる。オンライン学習記録では、全員の学習記録が1枚のワークシートとなっているので、クラスメートの記述を参考にして自分の記述をするはずが、そのまま安易にコピーしてしまったのではないかと考える。

クラスメートの記述について、インタビュー調査でも、クラスメートの記述を参考にして学習内容を確認したり補完したりする (I-5、I-6、I-7)、クラスメートの学習や記録の書き方を参考にして記述する (I-8) というコメントがあった。

I-5 「聞き取れなかったことがあるし、理解できなかったこともあるので、ほかの書いた内容を見て、補えと思う。」(2014)

I-6 「自分が気づけなかったこともコメントからわかるようになります。」(2014)

I-7 「他の人のも見ると、話し合うことができる。他の人のわかる部分とか、全体に内容をまとめて、課題みると、なるほどとか、自分が課題で聞き逃した部分とかを見ることができる。参考になる。」(2013)

I-8 「クラスメートの記録を参考にした。ほかの人はどういうふう記録を書いているか、どんな構造ですか、について参考にした。」(2014)

さらに、クラスメートの記録によって、「感心した」(I-9)「やらなきゃという気分になる」(I-10)「自分が一番少ないと格好がつかない」(I-11) など記録を書くことへの動機づけが強化されているコメントもあった。

I-9 「内容は何人かはすぐまじめに記録を書いているので、感心した。」(2013)

I-10 「クラスメートのコメントは参考になった。クラスメートはまじめに授業聞いていると感心する。私もやらなきゃという気分になる。」(2014)

I-11 「みんな長く書いているのもっと書きたいという気持ちになる。自分が一番少ないと、格好がつかない。じぶんももっと書きたくなる。」(2014)

また、クラスメートに自分がコメントを書く、自分の記録にクラスメートからコメントをもらう活動では、クラスメートが指摘した点について自分に間違いがないか振り返る (I-12)、クラスメートから指摘され再考する (I-13) などを行っていることがわかった。

I-12 「クラスメートの記録に間違いがあった場合に、自分も間違いがあるかもしれないと振り返ることができた。気づくことができた。自分の間違いを発見する。」(2013)

I-13 「専門用語について、ちょっと弱いので、書いた課題はちょっと専門用語じゃない用語もかいたけど、『クラスメート』は専門用語じゃないからもう1度考えてくださいってあって、もう1度考えた。」(2014)

学習記録にクラスメートとの協働学習を取り入れたことで、予想外の問題は確かにあった。しかし、クラスメートの学習記録やクラスメートとの相互評価により、不十分だった知識の補足や、学習への励まし、自分とは異なる考えの提示などが行われ、それが自己評価や振り返りの促進、授業や課題への積極的な取り組みにつながっているという効果も見られた。

7. まとめと今後の課題

本実践でeポートフォリオを活用することで、学習者は、授業時間に限定されず、自分のペースで時間的な制約がなく、自由に記録することができ、学習記録への記述量がそれまでと比較し大幅に増加した。また、担当教員だけでなくクラスメートの記録も見られることができるため、自分の意見や感想は、教員のみ限定されたメッセージ発信ではなく、クラスメートも含めた複数の他者へのメッセージの発信となった。複数の他者へのメッセージ発信を続けていくことで、意見や感想も単純な記述ではなく、より省察が進んだ記述となっていったのではないかと考える。さらに、クラスメートとの相互作用からそれが高められたことも窺えた。

一方、課題も見えてきた。これまでの学習記録で見られた、学習者が理解できなかった箇所への質問は減少した。これは、教員のみ限定されたメッセージ発信ではなくなり、自分の意見や感想が、いきなり複数の他者への一斉発信となり、個別性の高い意見やメッセージは書きにくくなってしまったためと考えられる。これは個々のニーズに対応する機会を逃してしまっているおそれもあるため、今後は個別対応できるようなやり方も組み合わせる必要がある。

また、記述内容の編集や統合も学習者自身が容易に行うことができるため、クラスメートの記述を安易にコピーしてしまったのではないかと疑われる記述部分も見られた。

「他の学習者の記述に強く影響を受けてしまうので、それを敢えて見ないようにした」と述べる学習者もいた。他の学習者の記述の影響は良くも悪くも大きいといえる。今後の授業においては、eポートフォリオにおける協働学習や相互評価の意義を議論するなどして、理解した上で、より丁寧に進める必要があるだろう。

eポートフォリオは、日本語学習において広い範囲での活用が期待でき、本実践でも確かに効果を実感するものである。今後はこれらの問題点について対処しながら進める必要がある。

付記

本実践の準備、調査及び調査資料の分析は、著者二人の討議で進め、福島が2013年度春学期、三宅が2013年度秋学期、2014年度春学期の実践授業を担当した。また、学習者インタビュー及び本稿6. の執筆の一部を福島が担当し、それ以外の本稿執筆は三宅が担当した。

謝辞

- ・ 本実践は、桜美林大学日本語プログラムにおいて行ったものである。
- ・ 授業実践にあたり、神奈川県環境情報センターおよび桜美林大学において以下の講義にご協力をいただいた。講義を担当した先生方に感謝する。
「アメリカの文化」「政治学概論」「環境リスク論」「表現論A(メディア表現論)」「キリスト教入門」「環境経済論」「日本経済入門」
- ・ 「日本語演習(上級・聴解とノートの取り方)」を受講した留学生全員の協力を感謝する。受講生の協力なしには、この研究は成立しえなかったものである。
- ・ 本研究は、桜美林大学言語教育研究所より助成を受けたものである。

参考文献

- Schunk ,D.H & Zimmerman, B.J. (2008) *Motivation and Self-Regulated Learning Theory, Research, and Applications*. Lawrence Erlbaum Associates. (=塚野州一編訳『自己調整学習と動機づけ』北大路書房)
- 奥野雅和 (2007) 「コメントカードとテキストマイニング」『年会論文集』第23号、pp134-137、日本教育情報学会
- 荻宿俊文、朝川哲司、石井理恵、中尾根美沙子 (2012) 「コミュニケーション・デザイン教育における学習成果の視覚化」『教育メディア研究』第18号、pp1-11、日本教育メディア学会
- 藤井美和、李 政元、小杉 考司 (2005) 『福祉・心理・看護のテキストマイニング入門』中央法規出版
- 福島智子・三宅若菜・今井美登里 (2009) 「大学講義の理解を目指した日本語授業の試み—専門科目の講義を素材として—」『第31回大学教育学会大会要旨集録』pp170-171
- 福島智子・三宅若菜 (2011) 「日本語授業における大学講義参加の取り組み」『第33回大学教育学会大会要旨集録』pp168-169
- 森本康彦 (2012) 「ポートフォリオの普及」小川賀代・小村道昭『大学力を高める eポートフォリオ—エビデンスに基づく教育の質保証を目指して』pp24-43、東京電機大学出版局
- 三宅若菜・福島智子 (2012) 「講義理解を目指した日本語学習の実践—留学生に対する学習デザインの提案」『桜美林言語教育論叢』pp 159-172
- 三宅若菜・福島智子 (2013) 「接続詞に注目した大学講義の試み—専門科目の講義をもとに」『桜美林言語教育論叢』pp131-141